

# 清末刊行の中国文人体解剖学書について

日本医史学雑誌第五十三巻第四号 平成十八年十二月十五日受理  
 平成十九年 十二月二十日発行 平成十九年 六月 八日受理

松本秀士

立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻博士課程後期課程

〔要旨〕『全体闡微』（一八八二）は、近代中国にはじめてもたらされた中国文による人体解剖学の専門書で、ヘンリー・グレイの *Anatomy, descriptive and surgical*（初版一八五八）をもとに編訳された。『全体闡微』は、解剖学用語の中国語訳を定める意図で刊行され、当時の広東・上海・福州を中心に活動する医療宣教師の間で広く支持された。『全体通考』（一八八六）もグレイの解剖学書をもとに編訳され、清朝の附属機関である京師同文館より刊行されたが、『全体闡微』と異なる訳語が用いられた。つまり、近代中国における西洋医学の移入で、グレイの解剖学書は重要な役割を果たしたが、解剖学用語の中国語訳は、中央と地方とで不統一に終わったのである。

キーワード——『全体闡微』、『全体通考』、医療宣教師、ヘンリー・グレイ (Henry Gray)

*Anatomy, descriptive and surgical*

## はじめに。

一般に、英国人医療宣教師ホブソンが編訳した『全体新論』（一八五二）<sup>①</sup>は、近代中国においてはじめての中国文による西洋解剖生理学書として知られる。そして今日も、近代中国における本格的な西洋医学移入の起点を担った書として高く評価される。

しかし、『全体新論』が伝えた解剖生理学の内容はあくまで教養レベルのものであって、近代中国にはじめて中国文による本格的な人体解剖学の専門書がもたらされるのは、後の米国人医療宣教師オスグッドらによる『全体闡微』<sup>②</sup>（二八八一）の刊行を待つこととなる。『全体闡微』は、主にヘンリー・グレイの *Anatomy, descriptive and surgical* をもとに中国文に編訳された人体解剖学の専門書である。また、清朝政府の一機関内に設立された京師同文館からは『全体通考』（二八八六）が刊行されており、これもグレイの同書をもとに編訳された中国文人体解剖学書である。つまり、清末の中国においては、グレイの同書をもとにした翻訳解剖学書が、西洋医学移入の重要な役割を果たしたのである。

従来の研究では、それら近代中国における翻訳解剖学書の具体的意義や内容については、充分検討されてこなかった。本稿では、『全体闡微』『全体通考』の両書とグレイの原書を中心に論じたい。

## 一、『全体新論』について

『全体新論』については、すでに様々な研究がなされているが、ここでは再度本稿の視点で簡単に触れておきたい。

英国人宣教師ベンジャミン・ホブソン (Benjamin Hobson 一八一六～一八七三 中国名 合信) による『全

『全体新論』(一八五二)が、近代中国における西洋医学移入の第一歩を担った書であるという側面から、『全体新論』の果たした役割を、日本における『解体新書』の果たした役割に重ねてみる必要がある。しかし、『全体新論』に記される医学の内容は概略程度のものであるだけでなく、伝道のための内容を大きく盛り込んでおり、厳密な意味で医学の専門書とはいえないこと、そして、ホブソンという異邦人主導で編訳されたものであることには注意が必要である。つまり、日本において『解体新書』が果たした西洋医学受容の原点的役割と、中国において『全体新論』が果たした西洋医学移入の原点的役割には質的な違いが存在するのである。

そうした注意をもつ『全体新論』ではあるが、この書が多数の人体解剖図を掲載することから、当時の中国伝統の医家たちの注目を集めている。特に「中西医匯通派」と呼ばれる中国伝統の医家の一派の著した医学書では、『全体新論』に掲載される人体解剖図が多数引用されている。<sup>③</sup>『全体新論』に掲載される図は二百七を数えるが、その全ては人体解剖図ではなく、ヒト以外の動物に関するもの等を含む。<sup>④</sup>ヒトに関する解剖図だけをピックアップすれば百六十四を数えるが、これらの中には病態を表す図が十点、胚胎や胎児等を表す図が十一含まれる。つまり、『全体新論』に掲載される図の中で、正常態の人体解剖図だけを数えれば百四十三である。『解体新書』『重訂解体新書』『医範提綱』の三書に掲載される人体解剖図を数えると、それぞれ順に百二十八、百三十、六十五であるから、これらと比較する限り、『全体新論』が掲載した人体解剖図が、視覚的情報量という側面では一定のものを備えることがわかる。

ホブソンが、中国への西洋医学の移入を意図して次々に刊行していった『全体新論』(一八五二)、『博物新編』(一八五五)、『西医略論』(一八五七)、『婦嬰新説』(一八五八)、および『内科新説』(一八五八)は、後に『西医五種』としてひろまり、近代中国に西洋医学の体系を伝える初步的役割を果たしたことは、今日の一般的な評価である。しかし、ホブソンの直後に中国で活躍した医療宣教師オスグッドは、『全体新論』があくまでも入門者向け

に西洋医学の概要を伝えたものに過ぎないと批判している。<sup>(6)</sup>そして、オスグッドは中国に本格的な人体解剖学の専門書をもたらす明確な意図をもって、『全体闡微』を編訳したのである。

## 二、『全体闡微』について

『全体闡微』は、米国人医療宣教師オスグッド (Dauphin William Osgood 一八四五—一八八〇 中国名 柯為良) らが、ヘンリー・グレイの *Anatomy, descriptive and surgical* をもとに編訳した中国文による人体解剖学の専門書である。オスグッドは福州の聖教医館を拠点に医療宣教活動を展開し、他に同医館での活動状況等をまとめた『医館略述』を刊行している。<sup>(7)</sup>

『全体闡微』の初版刊行は一八八一年であるが、オスグッドによる序は一八八〇年につくる。『全体闡微』は全六巻三冊の構成であるが、オスグッドは一八八〇年八月に熱中症により殉職したために、実際にオスグッド自身が書き上げたのは巻一、巻二、および全巻の巻末に設けられた英語—中国語による解剖学用語対訳表 *anatomical vocabulary in English and Chinese* のみである。そして、彼の同僚であるホイットニー (H. T. Whitney) らが、オスグッドの意志を受け継ぎ、残りの巻三から巻六までを完成させ、一八八一年に刊行するに至ったのだ。<sup>(8)</sup> オスグッドが書き上げた巻末の *anatomical vocabulary in English and Chinese* は、全巻で用いられる解剖学用語の対訳表で、カー(後述)を中心とする医療宣教活動における解剖学用語の中国語訳を確定する意図上において作成されたものである。そして、ホイットニーらは、オスグッドの作成した対訳表に基づいて、『全体闡微』を完成させた。つまり、オスグッドは『全体闡微』の編訳半ばで没してはいるが、全巻で用いられる主要な解剖学用語の中国語訳の確定という最も重要な作業は完成させたのである。『全体闡微』巻末の対訳表 *anatomical vocabulary in English and Chinese* にリストアップされる解剖学用語は千七百三十三語を数える。

一方、ホブソンの『全体新論』をはじめとする『西医五種』で中国語に訳出された解剖学の語彙には、多くの異同がみられる。たとえば、広義の神経を意味する中国語訳をみれば「腦気筋」「腦筋」「筋」「腦髓筋」が用いられているように、あまりにも一貫性をもたないものであることがわかる。そして、ホブソンは中国における医療宣教活動最後の年である一八五八年に『医学英華字積』を刊行しているが、この書の主旨は語積、すなわち原語（英語）の医学用語を中国文で説明したものであって、医学用語の中国語訳を確定させようとする明確な意図はみられない。<sup>10</sup>つまり、ホブソンの中国での刊行活動の集大成というべき『医学英華字積』においても、解剖学用語としての体系的な中国語訳は示されなかったのである。分量的な比較においても、『医学英華字積』にリストアップされる解剖学に関する見出し語は六百五十四を数えるにとどまり、『全体闡微』巻末の対訳表で示された千七百三十三語の解剖学用語を大きく下回るものである。

オスグッドが『全体闡微』で原語（英語）の解剖学用語を中国語に訳出する際に足がかりとしたのは、ホブソンが『全体新論』で創出した中国語訳であるが、ホブソンの中国語訳にある問題には充分注意が払われている。先に触れたように、ホブソンは広義の神経を意味する中国語訳として「腦氣筋」「腦筋」「筋」「氣筋」等、数種類を用いたが、『全体闡微』でそれは一貫して「腦筋」の語で統一されている。

また、『全体闡微』に掲載される人体解剖図の全ては正常態に関するもので、図数は二百七十三を数える。『全体新論』に掲載される正常態の人体解剖図は百四十三であるから、『全体闡微』はそれをはるかに上回る人体解剖図を掲載するものである。

オスグッドは、一八七七年に上海で開かれた宣教師による協議会で、中国文による本格的な解剖学テキストの編纂を引き受けており、この協議会での要求に従って刊行されたのが『全体闡微』である。<sup>11</sup>一方、ホブソンの医療宣教活動の後に、最も精力的に翻訳医学書の執筆活動を行ったのは米国人宣教師のカー (John Glasgow Kerr) 一

八二四―一九〇一 中国名 嘉約翰)で、カーは一八五四年に広東入りした後、一八五九年には同地に博済医院を設立させ、医院長の地位に就いた。<sup>12)</sup>そして、カーは自ら中国文による西洋医学書を編纂し、それを併設の羊城博済医局から次々と刊行していった。カーは自ら編纂した中国文西洋医学書の中で、『全体闡微』で確定された解剖学用語の中国語訳を採用するとともに、人体解剖学の専門書として『全体闡微』を参照するように推奨している。<sup>13)</sup>

カーが編纂した『内科闡微』の一八八九年の再版本等には、『全体闡微』が羊城博済医局(羊城とは今日の広東)や上海美華書館等より発行されていることを宣伝する広告が挿入されている。また、一八九三年に福州美華書局より刊行された『保福山聖教医館略述十八編』にも、カーの著作とともに『全体闡微』をあげた広告がみられる。<sup>14)</sup>つまり、『全体闡微』は、カーの著作とともに、広東・上海・福州を中心に広く販売されていたのである。なお、それらの広告に一八八六年刊行の『全体通考』の書名はみられない。

### 三、『全体通考』について

『全体通考』(一八八六)は、英国人医療宣教師ダッジョン(John Dudgeon 一八三七―一九〇一 中国名 徳貞)による編訳解剖学書で、京師同文館(所在地は今日の北京)より刊行された。<sup>15)</sup>京師同文館は洋務運動の一環として、一八六二年に清朝政府の外交機関である総理各国事務衙門の下に附設された教育部門である。当初は外国語教育が主であったが、後に西洋の各学科も幅広く教育するとともに、西洋の各学科の教科書を刊行しており、『全体通考』も京師同文館における医学教育のテキストとして編訳されたものである。つまり、『全体通考』は専ら京師同文館という清朝の一機関内での刊行物であり、広東・上海・福州を中心に広く販売された『全体闡微』ほどの広汎性をもたないものである。なお、ダッジョンは一八六〇年に北京に入ると、一八六四年に同地に英国教会の設立した「施医院」の院長を務めた。その後の一八七一年、京師同文館に医学講座が開設されると、この講座の初代教官を

務めた。<sup>(16)</sup>

『全体通考』も『全体闡微』と同様に、グレイの *Anatomy, descriptive and surgical* をもとに編訳された中国文による人体解剖学書である。『全体通考』は巻首、十八巻、図上下巻の全十八冊の構成である。『全体闡微』が六巻全三冊の構成であるのと比較しても、大規模なものであることがわかる。『全体通考』の最大の特徴は、解剖図が別冊の上・下巻にまとめられているということで、総図数は五百八十五を数える。『全体通考』に掲載される解剖図の総数五百八十五のうち、正常態の人体解剖図は五百六十四を数え、これは全体の九十六%強を占める。残りの四%は、ヒト以外の動物に関する解剖図等で、読者のわかりやすさに配慮している。

先にも触れたように、ホブソンの『全体新論』は、全図数二百七のうち、ヒト以外の動物に関する解剖図は四十一を数え、これは全図数の約二十%を占め、正常態の人体解剖図は百四十三で、これは全図数の六十九%を占めるにとどまる。また、『全体新論』では本文の各所に一般科学や、東西の医療事情に関する内容が織り込まれるが、ダッジソンの『全体通考』では巻首の一冊としてまとめられており、人体解剖学を論じた本文と明確に分けている。そして、『全体新論』の本文にみられた宗教に関する内容は、『全体通考』では皆無となっている。それらのことからわかるように、『全体通考』は、いわゆる人体解剖学の専門書として編訳されたものであり、一方の『全体新論』はこれまで一般に認識されてきたような解剖生理学の専門書というよりも、むしろ教養書としての性質が強いといえる。

ダッジソンが『全体通考』で中国語に訳出した解剖学語彙は、ホブソンが創出した中国語による解剖学的語彙をもとにしたとみられるが、大部分はダッジソン独自に定めたものである。カーラの支持する『全体闡微』で定められた解剖学用語の中国語訳は取り入れていない。また、『全体通考』には解剖学用語の英語—中国語の対訳表が付されていないように、『全体通考』で定められた解剖学用語の中国語訳を中国に浸透させる意図はなく、あくまで、

京師同文館における中国人に対する基礎医学教育のテキストとして編訳されたものであることがわかる。

#### 四. 『解剖訓蒙図』について

日本においては松村矩明（一八四二～一八七七）が、グレイの *Anatomy, descriptive and surgical* に掲載される解剖図のみを編集した『解剖訓蒙図』（一八七二）を刊行している。<sup>(17)</sup> 『解剖訓蒙図』は、松村がレディー（Joseph Leidy 一八二三～一八九一 米）の *An elementary treatise on human anatomy* (1861) をもとに編訳した『解剖訓蒙』と一連のものである。<sup>(18)</sup> 『解剖訓蒙』では、原書にある解剖図の一切を不掲載とし、そのかわりとして刊行したのが『解剖訓蒙図』である。『解剖訓蒙』の序に「虞列乙氏ノ図絵、尤モ精詳ナリ、故ニ之ヲ模写シテ別冊ニ編成シ、以テ参考ニ供ス」とあるように、松村がグレイの *Anatomy, descriptive and surgical* に掲載される解剖図を評価したことによる。<sup>(19)</sup> 『解剖訓蒙図』は乾・坤二冊、全九十九葉で構成され、グレイの原書から引用の人体解剖図は三百五十七を数える。

『全体闡微』および『全体通考』の両書は、『解剖訓蒙図』が刊行された一八七二年より後のものであるが、両書ともにグレイの原書をもとに編訳されたものであって、『解剖訓蒙図』とは直接の接点をもたない。なお、『解剖訓蒙図』には日本語のみが記され、原語（英語）は記されないが、『解剖訓蒙』には主要な解剖学用語の原語（英語）の音が、カタカナで併記されている。

#### 五. ヘンリー・グレイの *Anatomy, descriptive and surgical* について

すでに述べてきたように、『解剖訓蒙図』『全体闡微』『全体通考』の三書が編訳のベースとしたのは、ヘンリー・グレイ（Henry Gray 一八二五～一八六一 英）の *Anatomy, descriptive and surgical* だ。初版は一八五八年である。



表1 *Gray's Anatomy, descriptive and surgical* の版本

版	出版年	主編者
1	1858	Henry Gray
2	1860	
3	1863	Timothy Holmes
4	1865	
5	1869	
6	1872	
7	1875	
8	1877	
9	1880	
10	1883	Pickering Pick
11	1887	
12	1890	
13	1893	
14	1897	Pickering Pick and R. Howden
15	1901	

グレイは、一八六〇年に第二版を出版すると翌年の一八六一年に病死している。しかし、その後も彼の意志を受け継ぐ研究者によって版が重ねられており、今日も *Gray's Anatomy* として刊行されている。以下の表1に、第十五版までの出版年と、各版の主編者をまとめた。

本稿では、グレイの *Anatomy, descriptive and surgical* (以下、「グレイの原書」と呼ぶ) の初版、第二版、第五版、および第八版で検討することができた。<sup>20)</sup> 版を重ねるごとに頁数と解剖図数が増加がみられるものの、基本的には初版の内容・構成を受け継いでいる。グレイの原書第五版・第八版では組織学的内容や発生学的内容をまとめた解剖

学総論 (General Anatomy) の章が加えられており、そのことが初版・第二版との最も大きな相違である。また、第八版では、初版から第五版までにみられた一部の解剖図を掲載していない。

『解剖訓蒙図』『全体闡微』『全体通考』の三書の中で、グレイの原書第五版・第八版にみられる解剖学総論の章立てを反映させているのは、唯一『全体闡微』のみである。『全体闡微』のホイットニーらによる英文序(一八八一年につくる)によると、編訳のベースとしたグレイの原書は *New American edition* で、一八七五年に刊行された第七版をベースにした可能性は低いとみられる。また、グレイの原書は、一八八〇年には第九版が出版されているが、当時の交通事情と、オスグッドが一八八〇年八月に福州で殉職していることから、この版をベースにした可能性は否定される。従って、『全体闡微』は一八七七年に

刊行されたグレイの原書第八版をもとに編訳されたと考えられる。

グレイの原書第五版にある解剖図は合計で四百六十二を数えるが、第八版での解剖図は合計で五百二十になっ  
ているように、版を重ねるごとに解剖図数は増加している。しかし、第八版では初版や第五版にある一部の解剖図を  
廃止している。たとえば、第五版にある Fig.389<sup>1</sup> および Fig.390 (初版でこれらは、それぞれ順に Fig.301<sup>1</sup>、Fig.302<sup>1</sup>  
ある) の解剖図は、第八版では掲載していない。当然のことながら『解剖訓蒙図』では、グレイの原書第八版で掲  
載されていないそれらの解剖図の引用があり、この点では確かにグレイの原書第五版に依拠したというこれまでの  
認識に合致する。しかし、『解剖訓蒙図』では、グレイの原書第五版にみられるような解剖学総論の章編成をもっ  
ていない。グレイの原書第五版の解剖学総論の章にみられる解剖図は、グレイの原書第二版では、その他の各章に  
挿入されており、『解剖訓蒙図』の引用する図は、グレイの原書第二版にみる解剖図の配置と同様である。<sup>22</sup> つまり、  
『解剖訓蒙図』がグレイの原書から引用する解剖図の配置は、第五版ではなく、第二版と同様のものである。

『全体通考』でも、グレイの原書第五版にみられる解剖学総論の章編成はなく、解剖図の引用・配置の点でも、  
グレイの原書第二版と同様の構成である。従って、『全体通考』は一八八一年刊行の『全体闡微』よりも遅い一八  
八六年の刊行であるが、少なくとも『全体闡微』の依拠したグレイの原書第八版、あるいは『解剖訓蒙図』が依拠  
したとされるグレイの原書第五版よりも以前の版をもとに編纂されたものであることがわかる。

次に、グレイの原書(初版・第二版・第五版・第八版で検討)、ならびに『解剖訓蒙図』『全体闡微』『全体通考』  
の三書に掲載される人体解剖図の数を、原書の示す解剖学の体系ごとに集計し、下記の表2にまとめた。なお、『全  
体闡微』『全体通考』の両書が引用した人体解剖図の中には、グレイの原書以外からのものが多数みられることか  
ら、下記の表2では、グレイ原書からのものであるか、非グレイ原書からのものであるかにより区別して図数を示  
した。

表2 グレイの原書とその編訳書に掲載される解剖図数

グレイ原書章立て	初版	二版	五版	八版	『解剖 訓蒙図』	『全体闡微』		『全体通考』	
						グレイ 引用	非 グレイ	グレイ 引用	非 グレイ
GENERAL ANATOMY	—	—	67	93	—	2	2	—	—
The Skeleton	98	115	115	115	77	61	9	105	90
The Articulations	31	31	31	33	31	19	1	31	0
Muscles and Fasciae	57	58	58	60	58	31	3	58	2
The Arteries	29	31	31	31	31	3	27	31	4
The Veins	11	11	11	11	11	3	6	11	5
The Lymphatics	6	6	6	6	6	1	6	6	1
Nervous System	41	44	42	43	44	18	14	44	14
Organs of Sense	22	23	22	26	23	8	8	23	16
Organs of Digestion and their Appendages	32	32	34	42	32	6	13	32	21
The Thorax	3	4	4	4	3	1	3	4	10
Organs of Voice and Respiration	8	12	12	16	12	3	4	11	0
The Urinary Organs	4	4	4	16	4	1	3	4	0
Male Generative Organs	3	3	3	4	3	3	5	3	2
Female Organs of Generation	3	6	5	5	6	2	1	6	4
Surgical Anatomy of Inguinal Hernia	3	3	3	3	3	0	3	3	0
Surgical Anatomy of Femoral Hernia	5	6	6	4	6	0	2	6	0
Surgical Anatomy of Perineum and Ischio-Rectal Region	7	7	8	8	7	0	1	7	10
図数合計	363	396	462	520	357	162	111	385	179

『全体闡微』『全体通考』の両書は、一般にグレイの解剖学書の漢訳書とされてきたが、表2で明らかのように、グレイ以外の書からも多くの人体解剖図を引用しており、実際には純粋にグレイの原書のみをもとにしたものではないことがわかる。『全体闡微』では、グレイ以外の引用を一切明らかにしてないが、『全体通考』では、グレイの他にルター・ホルデン (Luther Holden 一八一五～一九〇五 英) やサー・チャールズ・ベル (Sir Charles Bell 一七七四～一八四二 スコットランド) の解剖学書を参考にした旨が巻首に記される。

## 六. グレイをめぐる神経系の訳語について

一般に、中国伝統医学の流れからは、今日的な神経系の概念が直接には起きなかったとされている。このため、中国に伝わってきた西洋の人体解剖学の中でも特に、神経系に関する内容



## Cranial Nerves.

THE Cranial Nerves, nine in number on each side, include those nerves which arise from some part of the cerebro-spinal centre, and are transmitted through foramina in the base of the cranium. They have been named numerically, according to the order in which they pass out of this cavity. Their names are also derived from the part to which each is distributed, or from the special function appropriated to each. Taken in their order, from before backwards, they are as follows:—

- |                              |                                    |
|------------------------------|------------------------------------|
| 1st. Olfactory.              |                                    |
| 2d. Optic.                   |                                    |
| 3d. Motor oculi.             |                                    |
| 4th. Pathetic.               |                                    |
| 5th. Trifacial or Trigemini. |                                    |
| 6th. Abducens.               |                                    |
|                              | 7th. { Facial or Portio dura.      |
|                              | { Auditory or Portio mollis.       |
|                              | { Glosso-pharyngeal.               |
|                              | 8th. { Pneumogastric or Par vagum. |
|                              | { Spinal accessory.                |
|                              | 9th. Hypoglossal.                  |

図5 グレイの原書第二版 p 535 脳神経の節の冒頭  
(グレイの原書初版・第五版・第八版も同様)

は重要である。ここでは、そのことを念頭におき、グレイの人体解剖学書をめぐる神経系の解剖学用語の訳語を焦点に検討する。

グレイの原書では、初版・第二版・第五版・第八版のいずれの版においても、脳神経を九対と数える旧説をベースにしながらも、脳神経を十二対と数える新説を併記している(図5参照)。しかし、『解剖訓蒙図』『全体闡微』の両書では十二対の新説のみを採用し、十二対の各脳神経に対する訳語を定めている。一方、『全体通考』では、脳神経を十二対と数える新説については概略を説明するにとどめ、脳神経を九対と数える旧説に従って中国語訳を与えている(表3参照)。

次に、『解剖訓蒙図』『全体闡微』『全体通考』の三書の伝える脳神経・脊髄神経の内容を焦点に、その訳語を表3〜4にまとめた。なお、『解剖訓蒙図』にみる訳語は、『解剖訓蒙』にみる訳語と同様である。しかしながら『解剖訓蒙図』は、グレイの原書に従って解剖図中に各部位の名称を書き込む手法を採用しているために、脳神経の一部の俗名を記していない(たとえば、動眼神経、滑車神経は第四対、第五対と記されるのみである)。このため、下記の表3〜4では『解剖訓蒙図』に代えて『解剖訓蒙』の訳語を比較対照とした。<sup>(23)</sup>

グレイの原書(初版・第二版・第五版・第八版)では脊髄神経を、頸神経八対、胸神経十二対、腰神経五対、仙骨神経五対、尾骨神経一対の合計

表3 脳神経の訳語に関する比較

グレイ原書	『解剖訓蒙』	『全体闡微』	『全体通考』	現代日本語
1st/Olfactory.	第一対神経／ 嗅神経	第一対脳筋／ 鼻脳筋	第一対脳筋／ 司臭脳筋	第1脳神経／ 嗅神経
2d/Optic.	第二対神経／ 視神経	第二対脳筋／ 眼脳筋	第二対脳筋／ 司視脳筋	第2脳神経／ 視神経
3d/Motor oculi.	第三対／動眼 神経	第三対脳筋／ 運動眼筋	第三対脳筋／ 運動眼球之脳 筋	第3脳神経／ 動眼神経
4th/Pathetic.	第四対神経／ 滑車神経	第四対脳筋／ 小脳筋	第四対脳筋／ 滑車筋	第4脳神経／ 滑車神経
5th/Trifacial (Trigemini). ※	第五対神経／ 三枝神経	第五対脳筋／ 三岔脳筋	第五対脳筋／ 三岔筋	第5脳神経／ 三叉神経
6th Abducens.	第六対神経／ 外送神経	第六対脳筋／ 眼外脳筋	第六対脳筋／ 眼外直肌脳筋	第6脳神経／ 外転神経
7th/Facial (Portio dura). ※	第七対神経／ 顔面神経	第七対脳筋／ 面脳筋	第七対脳筋／ 臉脳筋	第7脳神経／ 顔面神経
7th/Auditory (Portio mollis). ※	第八対神経／ 聴神経	第八対脳筋／ 耳脳筋	第七対脳筋／ 司聴脳筋	第8脳神経／ 内耳神経
8th/Glosso-pharyngeal.	第九対神経／ 舌咽頭神経	第九対脳筋／ 食管頭脳筋	第八対脳筋／ 舌咽頭筋	第9脳神経／ 舌咽神経
8th/Pneumogastric (Par vagum). ※	第十対神経／ 肺胃神経	第十対脳筋／ 長脳筋	第八対脳筋／ 肺胃筋	第10脳神経／ 迷走神経
8th/Spinal accessory.	第十一対神経 ／副行神経	第十一対脳筋 ／兩段脳筋	第八対脳筋／ 副脊髓筋	第11脳神経／ 副神経
9th/Hypoglossal.	第十二対神経 ／舌下神経	第十二対脳筋 ／舌脳筋	第九対脳筋／ 舌下筋	第12脳神経／ 舌下神経

(※表中の括弧内は、グレイの原書に記される別称。前掲の図5参照)

表4 脊髄神経の訳語に関する比較

グレイ原書	『解剖訓蒙』	『全体闡微』	『全体通考』	現代日本語
cervical nerves	頸神経	頸脳筋	項筋	頸神経
dorsal nerves	背神経	背脳筋	背筋	胸神経
lumbar nerves	腰神経	腰脳筋	腰筋	腰神経
sacral nerves	薦骨神経	鈎脳筋	方筋	仙骨神経
coccygeal nerves	尾底骨神経	尾閭脳筋	尾[骨底]筋※	尾骨神経

(※表中の角括弧部は、偏が骨、旁が底の漢字を表す)

三十一対と数えている。胸神経については、dorsal nerves (dorsal は「背部」の意) と呼称しており、日中の各訳書はこれに従って忠実に訳出している。しかし、『解剖訓蒙』が原書としたレディーの *An elementary treatise on human anatomy* によると、dorsal nerves に当たる脊髄神経を thoracic nerves (thoracic は「胸部」の意) と呼称しており、『解剖訓蒙』がグレイによる呼称を採用したことがわかる。そのことには、『解体新書』『重訂解体新書』『医範提綱』の三書がいずれも「背神経」の訳語を用いてきた背景がある。

## 七. 日中の神経系の訳語の流れについて

日本における人体解剖学の訳書の流れでは、『解体新書』『重訂解体新書』『医範提綱』の三書が起点的存在として知られ、松村は『解剖訓蒙』で、それら三書にみる訳語を斟酌し、より適したものを選択したとみられる(たとえば、嗅神経、視神経、動眼神経等)。しかし、松村独自による訳語もみられる(たとえば、滑車神経、三枝神経、外送神経等)。また、レディーやグレイの原書では新説の十二対の各脳神経語彙が記されており、旧説の九対より増加した分について、松村は「顔面神経」、「舌咽頭神経」、「副行神経」の訳語を新たに創出している。松村が創出した訳語の幾つかは、後の奥山虎章が編纂した『解剖生理学語部』(一八八一)<sup>(24)</sup>にも反映されている(たとえば、滑車神経、顔面神経、副行神経等)。「解剖生理学語部」は独一和の解剖生理学用語辞書であるが、巻末には特に神経系の語彙を体系的に示していることが特徴である。なお、同じ奥山虎章の『医語類聚』(一八七二)では、医学用語が単にアルファベット順に羅列されるだけで、神経系の語彙は体系的に示されていないばかりか、脳神経の一部を記すのみである。<sup>(25)</sup>

下記の表5〜6に、『解体新書』『重訂解体新書』『医範提綱』『解剖訓蒙』『解剖生理学語部』の五書に記される脳神経、および脊髄神経に関する主要語彙をまとめた。

表5 日本における脳神経語彙の流れ

『解体新書』	『重訂解体新書』	『医範提綱』	『解剖訓蒙』	『解剖生理学語部』
第一嗅覚神経	第一対 [鼻臭] 神経※	第一対 / [鼻臭] 神経※	第一対神経 / 嗅神経	第一対 / 嗅神経
第二瞳神経	第二対鑑神経	第二対 / 視神経	第二対神経 / 視神経	第二対 / 視神経
第三神経	第三対旋眼神経	第三対 / 動眼神経	第三対神経 / 動眼神経	第三対 / 動眼神経
第四神経	第四対輻神経	第四対 / 運車神経	第四対神経 / 滑車神経	第四対 / 滑車神経
第五神経	第五対分 [シ瓜] 神経※※	第五対 / 分布神経	第五対神経 / 三枝神経	第五対 / 三叉神経
第六神経	第六対外旋神経	第六対 / 牽引神経	第六対神経 / 外送神経	第六対 / 外旋神経
—	—	—	第七対神経 / 顔面神経	第七対 / 顔面神経
第七聴神経	第七対聴神経	第七対 / 聴神経	第八対神経 / 聴神経	第八対 / 聴神経
—	—	—	第九対神経 / 舌咽頭神経	第九対 / 舌咽神経
第八神経	第八対走散神経	第八対 / 蔓延神経	第十対神経 / 肺胃神経	第十対 / 迷走神経
—	—	—	第十一対神経 / 副行神経	第十一対 / 副行神経
第九神経	第九対舌神経	第九対 / 味神経	第十二対 / 舌下神経	第十二対 / 舌下神経

(※表中の角括弧部は、偏が鼻、旁が臭の漢字を表す)

(※※表中の角括弧部は、偏が三水、旁が瓜の漢字を表す)

表6 日本における脊髄神経語彙の流れ

『解体新書』	『重訂解体新書』	『医範提綱』	『解剖訓蒙』	『解剖生理学語部』
第十神経	第十対項神経	第十対 / 項神経	頸神経 八対	頸神経 八対
項部 七対	項部 七対	項椎 七対		
背部 十二対	背部 十二対	背椎 十二対	背神経 十二対	背神経 十二対
腰骨 五対	腰部 五対	腰椎 五対	腰神経 五対	腰神経 五対
膠骨 六対	薦骨 六対	薦骨 六対	薦骨神経 五対	薦骨神経 五対
			尾底骨神経 一対	尾 [骨底] 神経 一対※

(※表中の角括弧部は、偏が骨、旁が底の漢字を表す)



一方、中国における西洋医学の起点的編訳書と認識されてきたホブソンによる『全体新論』は、脳神経を九対と数える旧説を伝えたに過ぎず、また、必ずしも解剖学用語の中国語訳を確定していない。たとえば、嗅神経のことを「入鼻司聞香臭（鼻に入り、香りや臭みをかくのを司る）」、頸神経のことを「在頸骨裏生八対（頸骨の中で八対が生じる）」と記しているように、解剖学の各事項を中国文で説明したに過ぎず、解剖学用語としての中国語訳を定めていないものが多数ある。そのことは、ホブソンの『医学英華字釈』でも同様であり、しかもこの書では脊髄神経についての記載が全くない。つまり、ホブソンの『全体新論』『医学英華字釈』の両書が伝える解剖学に関する内容は、不十分なものであるのだ。

先に触れたように、『全体闡微』では脳神経を十二対と数える新説に従って中国語訳が定められている他、巻末の対訳表では千七百三十三語の解剖学用語の中国語訳が示されており、『医学英華字釈』がリストアップする解剖学に関する六百五十四の見出し語と比較しても、十分な内容をもつものである。

以上のように、ホブソンの伝えた解剖学の実質的な内容をみても、近代中国において、はじめて本格的な解剖学用語の中国語訳を確定させる役割を果たしたのは、実は『全体闡微』であったといわざるを得ない。そのことは先述したように、当時、医療宣教師として最も顕著な活動を展開したカーを中心に、『全体闡微』で確定された解剖学用語の中国語訳が、幅広く支持されていたことから明らかである。

下記の表7〜8に、中国の各翻訳解剖学書における脳神経、および脊髄神経に関する主要語彙の流れをまとめた。グレイの原書では、脳神経を九対と数える旧説に、十二対と数える新説を補足するにとどめているが、実質的には、十二対の脳神経の全名称をあげていることから、『全体闡微』では新説の十二対の数え方に従って訳語が定められている。しかし、後に刊行された『全体通考』では、グレイの原書に忠実に従い、新説はあくまで補足扱いで、訳語も九対の数え方に依拠していることには注意が必要である。

表7 中国における脳神経語彙の流れ

『全体新論』	『医学英華字釈』	『全体闡微』	『全体通考』
第一対入鼻司聞香臭	第一対入鼻孔司〔鼻臭〕※	第一対脳筋／鼻脳筋	第一対脳筋／司臭脳筋
第二対入眼珠司觀万物	第二対入眼司見	第二対脳筋／眼脳筋	第二対脳筋／司視脳筋
第三対入眼肉司運動	第三対運眼上胞	第三対脳筋／運眼脳筋	第三対脳筋／運動眼球之脳筋
第四対入眼肉司運動	第四対運転眼肉	第四対脳筋／小脳筋	第四対脳筋／滑車筋
第五対司覚痛癢	第五対入頭面司運動	第五対脳筋／三岔脳筋	第五対脳筋／三岔筋
第六対入眼肉司運動	第六対入眼直肉	第六対脳筋／眼外脳筋	第六対脳筋／眼外直肌脳筋
第七対一支分布面部司運動	第七対入頭面司運動	第七対脳筋／面脳筋	第七対脳筋／臉脳筋
第七対一支入耳内司聽声	第七対又一支入耳司聽	第八対脳筋／耳脳筋	第七対脳筋／司聽脳筋
—	—	第九対脳筋／食管頭脳筋	第八対脳筋／舌咽頭筋
第八対入心肺与胃司運用	第八対入心肺胃	第十対脳筋／長脳筋	第八対脳筋／肺胃筋
—	—	第十一対脳筋／兩段脳筋	第八対脳筋／副脊髓筋
第九対入舌司運動及別五味	第九対運動舌	第十二対脳筋／舌脳筋	第九対脳筋／舌下筋

(※表中の角括弧部は、偏が鼻、旁が臭の漢字を表す)

表8 中国における脊髓神経語彙の流れ

『全体新論』	『医学英華字釈』	『全体闡微』	『全体通考』
頸骨裏生八対	—	頸脳筋 八対	項筋 八対
背骨裏生十二対	—	背脳筋 十二対	背筋 十二対
腰骨裏生五対	—	腰脳筋 五対	腰筋 五対
尾骨裏生六対	—	鈎脳筋 五対	方筋 五対
		尾閭脳筋一対	尾〔骨底〕筋一対※

(※表中の角括弧部は、偏が骨、旁が底の漢字を表す)

## 八. 結び

表3〜8に示した中で最も注目されることは、脳神経を十二対、脊髄神経を頸神経八対、胸神経十二対、腰神経五対、仙骨神経五対、尾骨神経一对と分類して数える新説の流入である。日本では、レディーの *An elementary treatise on human anatomy* をもとに編訳された『解剖訓蒙』が、それを伝える媒介となっていたが、すでに述べてきたように、その背景にはグレイの原書も間接的に係わりをもつ。一方、中国においては、主にグレイの原書を編訳のベースとした『全体闡微』がそれを伝えている。グレイの原書の影響は、日本においてはあくまで間接的なものであったのに対して、中国においては大きな役割を果たしたのである。しかし、当時のグレイの原書各版では、脳神経を九対と数える旧説を主軸としていたことから、『全体通考』では脳神経を九対として伝えており、『全体闡微』が早々に新説の十二対の数え方を中国にもたらしたのに対して、医学史的に逆行する結果となった。

すでに論じてきたように、『全体新論』には解剖学用語の中国語訳を確定させる意図をもったものではなく、カーを中心とした広東・上海・福州における医療宣教師たちの統一的な意図を受けて刊行された『全体闡微』が、近代中国ではじめてその役割を担った。しかし、『全体通考』では、『全体闡微』の定めた中国語訳を用いなかったために、清末の中国における解剖学用語の訳語は、完全に統一されたものとはならなかった。つまり、清末の中国における解剖学用語の中国語訳には、広東や上海、そして福州の三地方を中心に活動する医療宣教師たちの間で用いられたものと、清朝政府の附属機関として中央で翻訳事業を展開する京師同文館で用いられたものの二つの異なる流れがあったのである。

日本においては、杉田玄白が *zenuwen* の訳語として「神経」の語を創出し、今日に続く。一方、中国においては、ホブソンが *nerve* の訳語として「脳筋」の語を創出し、ホブソンに続く医療宣教師たちも基本的に「脳筋」の訳語

を用いた。しかし、「脳筋」の訳語は「脳から伸びる神経」が直接の意味で、脳神経に限定されたものであるから、広義の神経を指す訳語としては不適切であるという問題をもつものである。つまり、中国にとって全くはじめての nerve という概念が、全く不適切な「脳筋」の訳語によって伝えられ、しかも、「脳筋」の訳語は神経系の各語彙の最も核となる語として用いられたのである。ホブソンによる『全体新論』が刊行された一八五一年から一九一一年の辛亥革命までを数えても、半世紀を超える期間、医療宣教師たちが西洋医学を中国に移入する中心的役割を担ってきた。しかし、辛亥革命直前には日本経由で西洋医学が流入しはじめ、民国期に至ってからは、ホブソンを起点とする医療宣教師たちが創出した解剖学用語の中国語訳は、和製漢語で置き換えられていったのである。

## 謝 辞

本稿執筆に当たり、富士ゼロックス小林節太郎基金研究助成の一部、および立教大学学術推進特別重点資金研究助成の一部を使用した。両機関のご厚意に対して、ここに深く感謝申し上げます。また、査読委員の先生方からのご助言に対して、厚く御礼申し上げます。

## 注および文献

- (1) *Memorials of Protestant missionaries to the chinese* American Presbyterian mission press 1867 (成文出版社影印、一九六七)では、『全体新論』を treatise on physiology と紹介しているが、解剖学の内容も扱い、解剖図を多数掲載すること等から、一般には解剖生理学書と認識されることが多い。
- (2) 『西医略論』序に「全体新論：広為伝布、蓋中土士大夫皆知為有用之書」とあることによる。合信『西医略論』江蘇上海仁濟書館蔵版、一八五七（筆者蔵）参照。
- (3) 『全体新論』の解剖図を引用する中西医匯通派の医学書の例として、羅定昌の『西医医粹』（一八八七）、唐宗海の『中西

匯通医経精義精義』(一八九二)、朱沛文の『華洋臟象約纂』(一八九三)などがあげられる。詳細は、拙稿「中華文明上に組み込まれる西洋医学」『或問』一〇号、近代東西言語文化接触研究会、二〇〇五参照。

(4) 本稿では、現存本が多くあり、中国で最も広く読まれたとみられる合信『全体新論』江蘇上海墨海書館蔵版、咸豊元年(一八五二)(筆者蔵)で検討した。この版の扉は、「咸豊元年新鐫」であるが、咸豊三年につくる「贅」一葉が加えられている。なお、初版本(Harvard-Yenching Library蔵参照)では石印による七枚の解剖図が織り込まれており、これには四十八の解剖図があるが、内容的には本篇に示される解剖図と重複するものが多々ある。

(5) 本稿で『解体新書』は、小川鼎三監訳、酒井恒編訳『ターヘル・アナトミアと解体新書』名古屋大学出版会、一九八六を、『重訂解体新書』は、杉田玄白新訳、大槻玄沢重訂『重訂解体新書』東都書肆 千鍾房、文政九年(一八二六)京都大学附属図書館蔵、および『重訂解体新書銅版全図』芝蘭堂、文政四年(一八二二)京都大学附属図書館蔵を、『医範提綱』は、宇田川玄真『医範提綱』風雲堂、文化二年(一八〇五)、九州大学附属図書館医学分館蔵を参照した。

(6) 『全体闡微』のオスグッドによる序に「合信氏、曾著全体新論一書、搬西医之大略」とある。本稿で『全体闡微』は、柯為良『全体闡微』福州聖教医館蔵板、一八八一(上海図書館蔵)、および柯為良『全体闡微』惜蔭書屋、一九〇五(上海図書館蔵)等を参照。

(7) 『保福山聖教医館略述十八編』福州美華書局、1893 (Harvard-Yenching Library蔵)参照。

(8) 『全体闡微』は一九〇五年にも(前掲、惜蔭書屋)縮刷再版されているが、巻構成を全三巻としたこと、巻末の対訳表を廃止したこと以外、内容に異同はみられない。

(9) 『全体闡微』にあるH.T. Whitneyらによる preface (英文序)を参照。

(10) 本稿で『医学英華字積』は Benjamin Hobson 1858 *A medical vocabulary in English and Chinese* (『医学英華字積』Shanghai Mission Press (立教大学図書館海老沢文庫所蔵)参照。『医学英華字積』に示される解剖学用語の中国語訳の問題については、拙稿「ホブソン(合信)にみる解剖学用語の語彙」『或問』一一号、近代東西言語文化接触研究会、二〇〇六で詳論した。

(11) 『全体闡微』のホイットニアによる英文序に「In accordance with the desire of the Committee on Text-books, appointed by Shanghai Conference in 1877, Dr. D. W. Osgood undertook the work of preparing the Anatomy for the Text-book series.」とある。

(12) 吉田寅『中国プロテスタント伝道史研究』汲古書院一九九七三二一六頁、および、馬伯英『中外医学文化交流史』文匯出版社、一九九三、四〇二頁参照。

- (13) 嘉約翰『西医内科全書』羊城博濟医局藏板、一八八二(上海図書館蔵)の総例に「凡臟腑肢体及肌膚血脈各処名目甚多、皆照全体圖微訳定之名目而用」、嘉約翰『衛生要旨』益智書会、一八八三(上海図書館蔵)の論内外集益の篇に「臟腑各部高下、位置不同、功用各別、另有專書備述、查閱全体圖微更知其詳」、嘉約翰『体用十章』羊城博濟医局藏板、一八八四(上海図書館蔵)の例言に「書中所用各名目、皆照全体圖微訳就之名用之以歸画一」とある。
- (14) 嘉約翰『内科圖微』(再版本)羊城博濟医局藏板、一八八九(上海図書館蔵)参照。なお、『内科圖微』の初版は一八七三年。本稿で『全体通考』は、徳貞『全体通考』同文館、一八八六(筆者蔵)参照。
- (15) 鄧鉄涛主編『中国医学通史』(近代卷)人民衛生出版社、二〇〇〇・三二〇～三二二頁、四八五頁参照。
- (16) 松村矩明『解剖訓蒙図』啓蒙義舎藏版、一八七二(国会図書館蔵)を参照。
- (17) Joseph Leidy *An elementary treatise on human anatomy* Philadelphia J. B. Lippincott, 1861 (大阪大学附属図書館生命科学分館蔵)、および、約瑟列第(シヨセフ・レデー)原著、松村矩明訳『解剖訓蒙』啓蒙義舎、一八七二(東京大学総合図書館蔵)を参照。
- (18) 他に、グレイの原書以外から引用の人体解剖図が一つ(乾巻「全体総筋之図」)がみられる。
- (19) 本稿では、初版は Henry Gray *Anatomy, descriptive and surgical* John W. Parker and son 1858 (Chartwell Books, Inc 1991 影印)、第二版は Henry Gray *Anatomy, descriptive and surgical* (second edition) Philadelphia Henry C. Lea, 1867 (1860 second edition の再版本)、第五版は Henry Gray *Anatomy, descriptive and surgical* (fifth edition) edited by T. Holmes London Longmans, Green and Co. 1869 (名古屋大学附属図書館医学部分館蔵) ならびに Philadelphia Henry C. Lea, 1870 (東京大学医学図書館蔵)、第八版は Henry Gray *Anatomy, descriptive and surgical* (eighth edition) edited by T. Holmes Philadelphia Henry C. Lea, 1878 (筆者蔵) 参照。
- (20) 西野嘉章「医学解剖と美術教育」(東京大学編『学問のアルケオロジ』東京大学出版会、一九九七)一四七頁参照。
- (21) グレイの原書第五版の解剖学総論の章にある解剖図のうち、『解剖訓蒙図』にもみられるものは、七十五丁にある「牝家之胚卵之図」、八十二丁にある「於背部之中央横断其髓之灰白質之図」と「於腰部膨大之中央横断其髓之灰白質之図」、八十三丁にある「於腰部膨大之中央縦断其髓之灰白質之図」、九十一丁にある「横断皮膚之図」である。しかし、これらの図は前後の解剖図の配置から判断して、解剖学総論の章立てをもちたいグレイの原書第二版にみる図の配置と同様である。これら『解剖訓蒙図』の解剖図と、グレイの原書第二版の該当する解剖図の挿入される章名、ならびに解剖図に付される

番号を示すと、七十五丁の図は female organs of generation の章に挿入される fig.379、八十二丁・八十三丁の図は nervous system の章に挿入される fig.257・fig.258・fig.259、九十一丁の図は organs of the senses の章に挿入される fig.297 にそれぞれ対応する。グレイの原書第五版でそれらの図は、全て解剖学総論 (General Anatomy) の章に配置換えされている。

(23) 『解剖訓蒙図』に記される脳神経の訳語を以下に示しておく。嗅神経 視神経 顔面神経 聴神経 舌咽頭神経 肺胃神経 副行神経 舌下神経 第二対 第三対 第四対 第五対 第六対 第九対 第十対 第十一対

(24) 奥山虎章『解剖生理学語部』名山閣、一八八一(筆者蔵) 参照。

(25) 奥山虎章『医語類聚』一八七二(明治期専門術語集)有精堂、一九八五影印) 参照。また、同じく奥山虎章による『増訂医語類聚』(一八七八)では、巻末に「神経略表」として神経系の語彙が体系的に示されているが、脳神経を九対と数える旧説に従っているばかりでなく、呼称に若干の違いがみられる。それによると、第五対までは『解剖生理学語部』と同様であるが、第六対は牽引神経、第七対は硬部・軟部に区分され、それぞれ順に顔面神経・聴神経、第八対では小分類として舌咽神経・迷走神経・副項神経があげられ、第九対は舌下神経としている。脊髄神経についても、『解剖生理学語部』の数え方や呼称とに若干の異同があり、項神経を七対、薦神経として六対を数えている(奥山虎章『増訂医語類聚』名山閣、一八七八、国会図書館蔵参照)。

## Chinese Books on Human Anatomy Published in the Late Qing Dynasty

Hideshi MATSUMOTO

*Quant-chanwei* (1881) is the first technical book on human anatomy written in Chinese and brought to Modern China. It was compiled and translated on the basis of *Anatomy Descriptive and Surgical* (first edition in 1858) by Henry Gray. *Quant-chanwei* was published with intent to establish Chinese translations for terms referring to anatomy, and it gained broad support from medical missionaries who mainly served in Guangdong, Shanghai, and Fuzhou at that time. *Quant-tongkao* (1886) was also compiled and translated on the basis of Gray's *Anatomy Descriptive and Surgical*. It was published from Jingshi Tongwen Guan, The Academy of Foreign Languages in the Qing dynasty, and they selected different words for the translation into Chinese from *Quant-chanwei*. Thus, although Gray's *Anatomy Descriptive and Surgical* played a great role in the introduction of Western Medicine into Modern China, there was no accordance between the national government and the provinces regarding Chinese translations for terms referring to anatomy.